

第8回 大賞(金の星賞)受賞作品

「昨日オバケ」

群馬県 県立桐生高等学校 2年 石田 祐也



賢治のまちから
高校生★童話大賞

大賞〈金の星賞〉

『昨日オバケ』

群馬県 県立桐生高等学校 二年 石田 祐也

目が覚めるとオバケになっていた。

昨日の夜もいつもどおりベッドに入ったはず、それなのになんでオバケになっちゃったんだらう。目が覚めてすぐだから、考えようとしても頭が回らない。でも、オバケになっているのははっきりわかった。

そのままベッドの中でじっとしていたが、お母さんは起こしにこない。いつもなら起こしに来る時間なのに。のそのそと自分の部屋から出て、家の様子をみてみたが、特に変わったことはなかった。毎日くわしく見ているわけではないけど、昨日もおとといもこんな感じだったと思う。違うのは僕がオバケになっていることだけ。

居間には見覚えのある人影があった。僕が声をかけようとしたのに、お母さんは目も合わせずに出て行ってしまった。やっぱり、僕のことが見えてないんだ。

お腹も空かないのにテーブルに座って、落ち着いて考えてみた。

どうやってオバケになったことを気付けたのか。これは一度オバケになればわかると思う。言葉では上手く言えないが、『オバケになった』感覚は割とハッキリとしているのだ。足が見えないとか、白い服を着なくちゃいけないとか、そういうハッキリとした『特徴』ではなく、『感覚』がうったえかけてくる。

「でも、あなたは死んではいませんよ」

後ろから声がした。驚いてイスごと倒れそうになるのをどうにか支え、ゆっくりと振り向く。そこには白衣姿の男の人が立っていた。眼鏡をかけ



て髪も服装も整っている。歳も見た目では若い。

「だ、誰。どこから入って来たの。なんで僕が考えていることが分かるの」
考えるより早く言葉が口から出てきた。白衣の人はゆっくりと息を吐き、
少し面倒そうにこういった。

「初対面で挨拶もしないのですか。それどころか質問攻めとは。まあ、どれもいずれ言うことになるので言っておきましょう。一度しか言わないのでしっかり聞いてくださいよ。私はジョシユと申します。あなたがオバケになったのでやってきました。会社から派遣されてやってきたのですよ。仕事ですから。あなたの考えていることが分かるのは、そういう仕組みの耳を持っているからです。便利な時もあります、不便利な時もあります。これで質問の答えになったでしょうか」

僕はただ聞いていた。でも、言っていることがあまり理解できない。頭の中では、昨日の僕が同じ状況——いきなり現れた男の人と質疑応答を交すこと——になったらどんな行動に出ただろうか。そんなことを考えていた。

「『一度しか言わない』と言っているのにあなたは聞く気がないのでね。それなら質問は慎んでもらいたいものです。昨日までのあなたが警察を呼ぼうが、その場から脱兎の如く逃げだそうが、今日からのあなたにはどれも関係のないことです。あなたは今日からオバケになったのですよ。さて、当社ではお客様が快適に過ごせることを理想としています。そのため、今度は私の方が質問させてもらいます。質問というよりは確認ですが。あなたは、ニイミヒロトさん。この国では小学生にあたりますね。家族は、父、母、妹で友人の数もこの国の小学生の平均の範囲内。全員の名前を挙げるのは割愛します。誕生日は…」

その後もジョシユという白衣の人は続けた。どれも当たっている。やっぱり不思議だ。

「というわけで、あなたがニイミヒロトさんで間違いありませんね」



僕は何も言わずに頷いた。「なぜ知っているのか」なんて聞いたところで、また難しい返事が返ってくるに違いない。

「では、私のことはジョシユとお呼びください。私はあなたのことをヒロと呼びます。あなたがオバケになる前に、多くの人に呼ばれていたように構いませんか」

これも頷くことしかできない。それ以外のあだ名も持っていないし、本名で呼ばれるのもしゃくだ。

この質問に答えた時、ジョシユの後ろの時計が鳴った。まずい、もう八時だ。僕は自分の部屋に駆け戻り、ランドセルを持って玄関に走る。扉を開くとジョシユが待っていた。

「あなたはオバケなんですよ。学校に行く必要なんかないでしょう。少なくとも、遅刻なんて気にするまでもない」

そんなことを言っていたが、僕は無視して走った。実は、まだ自分がオバケになってしまったことを信じきれていなかったのだ。もしもオバケになっていたとしても、それを楽しみたかった。ヒロはテレビで愛らしいオバケが人々にいたずらをしているのを見たことがあった。そのせいか、学校に行くまでの道のりもどこか楽しく、わくわくする。家と学校とのちょうど真ん中あたりでふと疑問に思った。振り返るとやはり、ジョシユはいた。

「なんですかその目は。オバケにとりつくのも楽じゃないんですから」
「そんなの知らないよ」

ジョシユは白衣の裾で眼鏡を拭いている。白衣は汚れひとつなく眩しかった。

「ああ言い忘れてましたけど、ヒロ君。おしゃべりは極力慎んでいただけますか。おしゃべりなオバケなんて聞いたことないでしょう。あなたの考えていることはわかりますから、頭で念じてくれれば伝わります。聞こえ



ます」

その答えに半分納得して歩き始める。通学路はいつも通りで、ヒロのよ
うな小学生が歩いている。だが、なんとなく違和感が残る。（そういえば、
さつき言ってた「死んでない」ってどういうこと。死なないでオバケにな
れるの）

「普通はなれません。しかし、ヒロ君の場合は特別です。今日の日没まで
は死なずにオバケになれるのです。素晴らしいサービスでしょう。だから、
今日は楽しみましょうよ」

複雑な気分になりこれには返事をしなかった。角を曲がり学校についた。
学校の中にまでついてきたジョシユに驚いた。こんな人を連れ込んだら、
先生に怒られるかもしれない。

「大丈夫です。私の姿はこの世の人には見えませんから。それと、ヒロ君
の姿もこの世の人には見えません」

なるほど、そういうことか。朝、お母さんと目が合ったのにも声を掛け
られなかった理由、通学路での違和感、それは僕の姿が見えなかったから
なんだ。

「そうです。気付いているとおもいましたが。ヒロ君は昨日と同じように
世界を見られますが、世界はヒロ君が見えませんし、そのランドセルも見
えません。だから、お話することはできませんね。でも、オバケになれば
動物と話せる力が特典としてつきます。これも、自慢のサービスです」

動物とは話してみたい、でも、死ぬ前の日に誰とも話せないのは少しさ
みしい。こう思ったがジョシユは返事をしなかった。いつもの教室につき、
扉を開ける。確かに扉は開いたはずだが、誰一人振り向きはしなかった。
やっぱり、どこかさみしい。そのさみしさと少しの不安に挟まれながらキ
ョロキョロと教室の中を見回す。よかった。ヒロの机は昨日と変わらずあ
った。



(そりゃありますよ。自分のものがなくなることほどさみしい事はないでしょう。日が暮れて、明日になってしまえばわかりませんが)

安心しながら席に着く。荷物を机に押し込み静かに椅子に座る。ジョシユは僕の横に立って教室の中をみている。誰も話しかけてこない。話しかけようとしたが誰も振り向いてくれない。僕は確かにここにいるのに。

数分後、先生が入ってきて朝の会がはじまる。ひとりひとり名前を読み上げ、クラスメートは元気よく返事をしている。しかし、ヒロの番はこなかった。順番を間違えたのかな、そう考えたがそのまま朝の会は終わってしまった。隣からため息が聞こえる。

(見えていないんだし、そうもなりますよ。気にしないでください。最初はこんなものですから)

なんか、いやだ。認めたくない。

少しずつ体の中が固まっていくような気がする。心臓が、グン、グンと動いているのを感じる。それでもジョシユは話しかけてこない。そのまま、一、二時間目がすぎて、長い休み時間になった。いつもなら外に出て友達と一緒にサッカーをしているのに、今日は違う。僕は見ているだけで、みんなは普段通り楽しんでいる。

この後も、授業は順調に進んでいった。でも、ヒロはそれを覚えていなかった。休み時間が終わったあとは、ずっと下を向いていたのだ。前を向いても目を向ける場所がない。『まっくら』って、こういうのを言うのかな。

(オバケって、いつもこんな気持ちなの?)

こう考えたとき、ジョシユが返事をしてきた。

「そうですよ。もうすぐ、ヒロ君も完璧なオバケです」

『もうすぐ』そう言われ、外を見て時計を見る。窓の外には人影がいくつも見えるが、人の気配はほとんどない。時間からすでに放課後になっていることがわかった。この時期ならもう数時間で日が暮れる。僕はジョシ



ユをまっすぐ見つめ、声に出してはっきり言った。『自分』を感じる。「僕、オバケにならない。なりたくない。思ってたより楽しくないし、なによりもさみしいよ」

ジョシユも目をそらさず返す。

「そう言われても、もう時間の問題ですし。私の仕事はヒロ君がオバケになるのをしつかり見届けることです」

「いやだ。ならないって決めたんだ。ジョシユは知ってるんでしょ。僕が元には昨日みたいに戻れる方法とか」

「困りましたねえ。知らないと言えば嘘になりますが、言ってしまうえば私の仕事はなくなってしまうですし」

はつきりしないジョシユの答えにいらだち、声の言葉が心の言葉に戻る。

(朝『お客様の快適が理想』って言ってたじゃん。教えてよ)

「そう言われては仕方ありませんね。わが社のモットーですから。それでは一度しか言わないのでよく聞いてくださいよ」

今度こそ、ヒロは集中して聞いていた。

「そもそも、ヒロ君がオバケになりたいと強く願ったから私は派遣されたのですよ。願ったのは…昨日の夜のことですね。何が原因でそう思ったのか、思い出してみてください」

そう言われ、ヒロは一生懸命思い出そうとした。去年おばあちゃんの家に行ったことは覚えている。先月、妹の運動会を見に行ったことも覚えている。おととい、友達とサッカーをしたことも覚えている。だが、昨日だけがすっぱりと抜けている。

(だめだよ、昨日だけ思い出せない)

「そうでしょうね。いえ、別にいじわるをしたかったわけではないのです。ヒロ君の『昨日』はすでにわが社の倉庫の中です。ヒロ君のお願いと交換で預かり、保管しています。逆に言えば、わが社の倉庫からヒロ君が昨日



を取り戻してしまつたら、お願いは返していただかねばなりません」

(じゃあ、『昨日』を思い出すためには何をすればいいの。ねえ教えてよ)
僕は焦っていた。こうしている間も、時間は進んでいるのだから。

「具体的には教えられません。ビジネスですので。ただ、昨日『やり残したこと』ができれば倉庫の鍵が開き、『昨日』はきつと返ってくると思います。もし見つけられなくてもご安心を。私が責任を持って、オバケの世界にお連れしますよ」

これはジョシユなりの冗談だったのかもしれない。ただ、僕はジョシユを睨みつけ、走りだした。

(「昨日やり残したこと」ってなんだろう。たぶん昨日も「いつもどおり」なことしかやってないと思うんだけど)

そう思いながら、足はいつもの河原にむいていた。今日も、友達がサッカーをしている。

(やっぱり、これじゃないのかな)

皆に交ざってサッカーをする。だが、ボールは蹴れない。当然、パスを求める声も届かない。楽しくない。

「残念でした。動いているものにはさわれませんし、違うみたいです」

ジョシユを睨んだが、目をそらし白衣をひるがえしたただけだった。立ち止まっている時間はない。足が自然と動きたがっている。動いてもらわなければ困る。

次に、神社によつた。しかし、そこには誰もいなかった。少し立ち止まって考えてみても、ここでやり残したことは思い出せなかった。よく来る場所だが、たぶんここにはない。

暮れる日差しが神社の境内を包み始めている。もう、うろろしてはいられない。

「オバケの世界もそう悪くありませんよ。もう行っちゃいましょう。私も



たまにならうかがえますし。オバケの世界ならオバケ同士、一人ではあり
ませんよ」

夕日を背中に歩くヒロに、ジョシユはそう投げかけた。もう睨みつける
元気もない。

そのとき、クラン、クランと足元で音がした。うつむきがちに歩いてい
たので、その正体はすぐにわかった。足にすり寄ってきたモノクロカラー
の鈴の音、それはこのへんで会う猫だった。特に名前を付けているわけ
はない。会うたびに首をなでていたので、クラン、クランの鈴の音は耳に
残っていたのだ。

「もう、きみとも会えないね。早く飼い主さんのところに帰ったら」
いつものように声をかけてしまった。そんなにゆっくりはしていられな
いのだが。その声に返事が返ってきた。

「会えないかどうかは知らないが、私の心配は無用だ」
思わず辺りを見渡す。僕の後ろにぼんやりとした表情と存在で立つジョ
シユ以外に誰もいない。

「今日はなでてはくれないのか。それほど忙しいのか、人間は」
僕の驚きはだんだん違う物に変わってきた。声の主は人間のまま僕を見
えているようだ。

「きみ、僕の声が聞こえるの。僕と話ができるの」
かがんだ僕に猫は目線をあわせ、また鈴をクランと鳴らす。
「たしかに、今日は何を言っているのか分かるな。いつもは口をパクパク
させて、何をやっているのかと思っていたが」

今朝のジョシユの言葉を思い出した。
『動物と話せる力が特典としてつきます』それは、こういうことだったのか。
これが最後のチャンスだ。

「ねえ、昨日、僕は何をしてたかな。どんな様子だった」



言葉に力が入る。そんな僕の様子を察してか、猫もあまり悩まず答える。「そんなことも忘れたのか。昨日も人間同士で玉を転がしあって、その後……ここでこうして、なでてくれただろう。そこからは分からん。だいぶ急いで家に帰ってしまっただろう」

猫の話聞いてるうちに思い出してきた。ヒロは最後まで聞き「ありがとう。たぶん、さよならじゃないや。また明日たくさん遊ぼう。もっと早い時間にね」

と言って走り出した。僕は明日の昨日が見えた。そんなヒロを見送った猫は「昨日も今日もたぶん明日も、猫には変わらない一日だけだな」と言い、クラン、と歩きだした。

家まで一直線の道のり。オバケの体なら、ものが少し当たったところで気にならない。

もうすこし時間は遅かった、が昨日もこうして走っていた。学校が終わるとすぐにいつもの友達と河原に向かった。その時は存分に楽しみ、やり残したことはなかった。家に帰る途中で猫に出会い、遅くなってしまった。何か、うれしくてたくさん話しかけた気がする。いつもならこんなに遅くはならない。でも昨日は特別な気がしていた。しかし、家に帰ったヒロは母親に、「何時だと思ってるの。もう、ずっと待ってたんだから」とすぐに言われた。

(こうじゃない。なんで今日怒るの。今日は特別な日なのに。もう知らない) ヒロは何も言わず自分の部屋に飛び込んだ。

(もう……こんなならオバケになりたい。誰にも怒られないオバケに) そのままヒロは眠りにおちていった。

僕は走り続け、ジョシユは滑るようになってくる。

「あの猫、何を言ったんですか。私には動物の言葉はわからなくて。そんなに急いでも、もう少しで時間切れです。無駄ですよ」



(秘密。だけど、たとえ間に合わなくても、無駄でも、言わなくちゃいけないことがあるんだ。やっとわかった)

もう日は暮れてしまったのかもしれない。家の前にやっとなつた。長い一日だった気がする。止まっていられるはずもない。急いで家に入る。お母さんが中にいるのがみえた。はやく、はやく。

「遅くなってごめんなさい。ただいま」

「おかえりなさい。ちゃんと手を洗いなさい」

これだ。これだった。

母親の返事を聞き、僕の体の中の固まっていた緊張が解けだしていき、解けだしたそれが自分の身体を満たしていくのが分かる。

「ほら、どうしたの。もうすぐみんな集まって誕生日会をやるんでしょ。早く手を洗って準備を手伝って」

そう、昨日は僕の誕生日だったのだ。だから、時間はいつもより早く流れていったし、猫との会話も盛り上がったのだ。でも、そのせいで、ごめんなさいの一言がでてこなかった。ちゃんと言えていればオバケになりたいなんて思わなかったはずだ。僕がやりのこしていたことは、これだった。

「間に合ってしまったようですね。今日ヒロ君がさみしかったように、ヒロ君を待っていたお母さんもきつとさみしかったんですよ。それでは、こちらが預かっていた『昨日』もお返ししました。また、『昨日』である『今日』からやり直してください。私の仕事はここまです。また私が必要になったらいつでもお呼びください」

僕が振り返った時には、もうジョシユはいなかった。

(ありがとう、でももう呼ばないよ)

と心の中で呟いたが返事は返ってこなかった。

楽しい誕生日会の思い出の中で、その日は眠った。もう、オバケになりたいたなんて思わなかった。